

ある華僑の 戦後日中関係史

日中交流のはざまに生きた韓慶愈



大類善啓

Ohrai Yoshihiro

大類善啓（おおるい・よしひろ）

1944年大阪市で生まれ、京都府（現、城陽市寺田）で育つ。

法政大学第一文学部哲学科卒業後、欧州、中東、アジアで遊ぶ。その後、週刊誌記者、フリーライターなどを経て79年以降、中国との交流に関わる。

手塚治虫のアニメ『鉄腕アトム』の中国でのテレビ放映業務に携わる。2002年、国交正常化30周年特別TV番組として〈孫文を支えた知られざる梅屋庄吉〉を企画、テレビ朝日で放映される。

論考に「台湾民主化運動におけるある視点～『客家風雲』を巡って」「水稻王 藤原長作物語——中国の大地に根づいた日中友好の絆」（『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』）「既存マスメディアは原発報道で敗北した！——日本版『ジャスミン革命』の新たな頁が開いた」「国際主義を超えて HOMARANISMO〈ホマラニスモ〉を！——K.マルクスからL.ザメンホフの人類主義へ」など。近年は「タンゴの Corazon（真髓）とは何だろう——極私的アルゼンチン・タンゴ論」「蘭子よ、安らかに眠れ——「大連体験」を昇華した藤沢蘭子のタンゴに思う」などのタンゴ評論を書く。

現在、一般社団法人日中科学技術文化センター理事、方正友好交流の会事務局長。

ある華僑の戦後日中関係史

——日中交流のはざまに生きた韓慶愈

2014年8月31日 初版第1刷発行

著者 大類善啓
発行者 石井昭男
発行所 株式会社 明石書店
〒101-0021 東京都千代田区外神田 6-9-5
電話 03 (5818) 1171
FAX 03 (5818) 1174
振替 00100-7-24505
<http://www.akashi.co.jp>
装丁 明石書店デザイン室
印刷／製本 モリモト印刷株式会社

（定価はカバーに表示してあります）

ISBN978-4-7503-4056-2

JCOPY 〈社〉出版者著作権管理機構 委託出版物

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。
複写される場合は、そのつど事前に、〈社〉出版者著作権管理機構
（電話 03-3513-6969、FAX 03-3513-6979、e-mail: info@jcopy.or.jp）
の許諾を得てください。

まえがき..... 3

序 章 帰国船は舞い戻ってきた..... 9

一九四五年夏、一路故郷へ出発／日本の敗戦を船上で聞く／再び日本で

第一章 故郷を離れハルピンへ、そして日本へ..... 17

貧しい中国東北での生まれ／張作霖爆殺事件から「満洲国」建国へ／ハルピン第一国民高等学校へ／「満洲国留学生」として日本へ／親切な日本の学友たち／迫ってきた日本の敗北／「満洲国政府」から帰国命令

第二章 焼け跡闇市時代の日本で..... 37

混沌とした日本の敗戦直後／焼け跡闇市の日本で／毛沢東より人気があった蒋介石／国民党への失望／新米記者誕生／東京工業大学へ進学／憂鬱な時代／国民党、敗北へ

第三章 新中国誕生へ..... 58

盛り上がる全学連運動／中華人民共和国の誕生／勝利に導いた寛大な解放軍精神／進展する日中友好運動／大陸派と台湾派に分かれた在日華僑たち／「歌と踊り」で結束する華僑たち／映画「白毛女」に感動／恋人美津と結婚／始まった日中友好運動／秘密黨員として活動

第四章 高まる華僑帰国運動..... 83

祖国建設のために／帰国の呼びかけに応えた学生たち／祖国中国へ帰
国する華僑たち／国民党員の父は息子の帰国に反対した／残留日本人
たちの中国からの引き揚げ

第五章

廖承志との運命的な出会い

帰国者を見送り舞鶴へ／学生代表として中国天津へ／運命を変えた廖
承志の一言

98

第六章

「冬の時代」の日中関係

華僑向け新聞の発刊準備／『大地報』の創刊／「李徳全旋風」巻き起こる
／廖承志との再会／呉学文との出会い／京劇の名優、梅蘭芳の来日／
梅蘭芳という男／周恩来も気をつかった梅の日本公演／台湾派が梅公
演を妨害／浮上した中ソ対立／大陸帰りの日本人たちとの出会い

107

第七章

「文化大革命」前の古き良き日中時代

憧れの作家、巴金が来日した／川端康成と骨董談義／映画スター趙丹
との出会い／趙丹『東京の休日』 高峰秀子との友情／趙丹らの日本滞
在報告／今井正ら日本の映画人を回想／六〇年安保闘争後の日本／〈文
革〉で消えた趙丹／さまざまな訪日団／日本の工業技術を中国へ伝え
たい／雑誌創刊の企画に横やり

138

第八章

「文化大革命」に翻弄される

宮本顕治による招宴／毛沢東、文化大革命を発動／至るところに影響

163

を及ぼした文革／難産だった『日本工業技術』の創刊／『大地報』の廃刊
／親族を訪ねて中国へ／「スパイ」と疑われていた韓慶愈／娘との再会

第九章 国交回復から文革終結へ……………182

電撃的なニクソン訪中発表／「馬賊」も現れた日中国交回復前後／キツ
シンジャー極秘訪中に馬賊も走る／ついに日中国交回復なる／周恩来、
朱徳、毛沢東の死／九月九日、毛沢東が死んだ／中国の激変に翻弄さ
れる華僑たち

第一〇章 改革・開放体制へ……………200

新たな時代の始まり／太極拳の楊名時を中国へ案内／趙丹との懐かし
い再会／始まった中国との広告交流／日中ビデオネットワークの設立
／中国広告では電通、博報堂をしのぐ／「鉄腕アトム」が中国で大人気
／多士済々の人材がいた?! 向陽社／新たな公益法人設立へ

終章 「もうひとつの昭和史」の扉……………225

韓との最初の出会い／秘められた日中関係史

あとがき……………236

解説……………加藤千洋……………239

関連年表……………246

ある華僑の
戦後日中関係史

日中交流のはざまに生きる

常陸韓廟助



大類善啓

Ohrui Yoshitiro

在日華僑、中国大陸を出自に持ち、一九四九年に成立した新中国を支持する華僑は、時に愛国華僑と呼ばれる。本書の主人公である韓慶愈かんけいゆうはまさに愛国華僑の代表的な一人であると言つていいだろう。戦後の在日華僑史を語る場合、彼の存在抜きに考えることはできないだろうと思う。しかし、そのように思えるようになったのは、韓から直接、彼の人生を聞きだすことになったからである。

二〇〇五年、私は仲間たちと「方正友好交流の会」ほうまさ（以下、「方正の会」とする）を立ち上げた。中国の黒竜江省ハルピン市郊外の方正県は、戦前、「満洲」に開拓団として入った人たちが流浪の末たどり着いた地だった。壮年の男たちが召集され、残った老人や婦人、子供たちがソ連参戦と日本の敗戦後の混乱のなか難民になり、飢餓と発疹チブスなどで斃れた。そんな人たちが五〇〇〇人ほど葬られている日本人公墓が、この方正に建立されている。

散乱する累々たる日本人の白骨の山を見た残留婦人は、自分たちで葬りたいと県政府に願ひ出た。当時の中国の周恩来総理は、「日本人も日本の軍国主義の犠牲者である」と、人々が安らかに眠れるように日本人公墓を建立してくれた。中国の輝かしい国際主義的精神が脈々と生きていた一九六三年のことである。

「方正の会」の顧問に就任してもらった韓に創立總會の際、挨拶をしてもらった。日本の敗戦後、自分が日本に残留せざるを得なかった当時の思いを重ねて、中国に残留した日本婦人のことを語った韓の話は、少なからぬ人々に感動をもたらした。

それから一年後の總會を終えた懇親会のことである。一五人ほどが集まり、それぞれ自己紹介をした。その時韓は、中国に帰国しようとして乗船したが、広島原爆投下のため、日本に戻らざるを得なかつた経緯などを語ったところ、「そういう体験を聞くのは初めてだ。ぜひ本にしたらどうか」という意見が出た。私は、その数年前から、韓から彼の辿った波瀾に満ちた人生について聴き取りをしていたが、そんな声を聞いて、韓の人生を紹介する意味を改めて確認したのであった。

多くの日本人は敗戦の時、涙を流した。しかし韓のような中国人たちにとって、日本の敗戦は悲しい出来事ではなく、まさに喜びに満ちた「解放」だった。この事実一つを取ってみても、多くの日本人にとって常識として映るような出来事も、また違ったおもむきや意味をもつものである。

中国大陸にルーツを持つ華僑は、度重なる戦乱を潜り抜けてきた人々の末裔らしく、自己の人生を大仰に語らないように思える。いつも淡々と生きているかのように見える。韓もその一人かもしれないが、韓の人生は、多くの日本人にとって知られざる戦中戦後史であると断言していいだろう。いわば秘められた昭和史なのである。日本と中国との長い交流の歴史も、韓のような人々の歩みを通して存続してきたのだらうと思う。本書を通してそのことが実感してもらえれば嬉しい限りである。

目次
ある華僑の戦後日中関係史——日中交流のはざまに生きた韓慶愈

まえがき..... 3

序 章 帰国船は舞い戻ってきた..... 9

一九四五年夏、一路故郷へ出発／日本の敗戦を船上で聞く／再び日本で

第一章 故郷を離れハルピンへ、そして日本へ..... 17

貧しい中国東北での生まれ／張作霖爆殺事件から「満洲国」建国へ／ハルピン第一国民高等学校へ／「満洲国留学生」として日本へ／親切な日本の学友たち／迫ってきた日本の敗北／「満洲国政府」から帰国命令

第二章 焼け跡闇市時代の日本で..... 37

混沌とした日本の敗戦直後／焼け跡闇市の日本で／毛沢東より人気があった蒋介石／国民党への失望／新米記者誕生／東京工業大学へ進学／憂鬱な時代／国民党、敗北へ

第三章 新中国誕生へ..... 58

盛り上がる全学連運動／中華人民共和国の誕生／勝利に導いた寛大な解放軍精神／進展する日中友好運動／大陸派と台湾派に分かれた在日華僑たち／「歌と踊り」で結束する華僑たち／映画「白毛女」に感動／恋人美津と結婚／始まった日中友好運動／秘密黨員として活動

第四章 高まる華僑帰国運動..... 83

祖国建設のために／帰国の呼びかけに応えた学生たち／祖国中国へ帰
国する華僑たち／国民党員の父は息子の帰国に反対した／残留日本人
たちの中国からの引き揚げ

第五章

廖承志との運命的な出会い

帰国者を見送り舞鶴へ／学生代表として中国天津へ／運命を変えた廖
承志の一言

98

第六章

「冬の時代」の日中関係

華僑向け新聞の発刊準備／『大地報』の創刊／「李徳全旋風」巻き起こる
／廖承志との再会／呉学文との出会い／京劇の名優、梅蘭芳の来日／
梅蘭芳という男／周恩来も気をつかった梅の日本公演／台湾派が梅公
演を妨害／浮上した中ソ対立／大陸帰りの日本人たちとの出会い

107

第七章

「文化大革命」前の古き良き日中時代

憧れの作家、巴金が来日した／川端康成と骨董談義／映画スター趙丹
との出会い／趙丹『東京の休日』 高峰秀子との友情／趙丹らの日本滞
在報告／今井正ら日本の映画人を回想／六〇年安保闘争後の日本／〈文
革〉で消えた趙丹／さまざまな訪日団／日本の工業技術を中国へ伝え
たい／雑誌創刊の企画に横やり

138

第八章

「文化大革命」に翻弄される

宮本顕治による招宴／毛沢東、文化大革命を発動／至るところに影響

163

を及ぼした文革／難産だった『日本工業技術』の創刊／『大地報』の廃刊
／親族を訪ねて中国へ／「スパイ」と疑われていた韓慶愈／娘との再会

第九章 国交回復から文革終結へ

..... 182

電撃的なニクソン訪中発表／「馬賊」も現れた日中国交回復前後／キツ
シンジャー極秘訪中に馬賊も走る／ついに日中国交回復なる／周恩来、
朱徳、毛沢東の死／九月九日、毛沢東が死んだ／中国の激変に翻弄さ
れる華僑たち

第一〇章 改革・開放体制へ

..... 200

新たな時代の始まり／太極拳の楊名時を中国へ案内／趙丹との懐かし
い再会／始まった中国との広告交流／日中ビデオネットワークの設立
／中国広告では電通、博報堂をしのぐ／『鉄腕アトム』が中国で大人気
／多士済々の人材がいた?! 向陽社／新たな公益法人設立へ

終章 「もうひとつの昭和史」の扉

..... 225

韓との最初の出会い／秘められた日中関係史

あとがき

..... 236

解説

..... 加藤千洋

239

関連年表

..... 246

序章 帰国船は舞い戻ってきた

一九四五年夏、一路故郷へ出発

うだるような夏の陽射しが眩しい。太陽から降り注ぐ光は強い。何もしなくても汗が吹き出るようだった。いよいよ新潟から帰国船に乗り、故郷の中国へ帰るのである。そう思うと緊張感もひとしおだった。

韓慶愈は今でも、その日がとても暑い日だったことを昨日のように覚えている。茨城県の常陸太田から水郡線に乗り、上菅谷で乗り換えて郡山へ行き、磐越西線に乗り換え、ようやく新潟に出たのである。日本各地から集まった「満洲」からの留学生たちは旅館に集合した。新潟にあった「満洲国」の領事館職員から、乗船の手続きなどの指示があった。一九四五年八月八日のことである。

その朝、先輩が新聞を見せてくれた。韓は改めて、ずっと新聞を見ていないような気がした。もっと寝たかった。それでも先輩から手渡された新聞が何か新しいニュースをもたらしてくれよう、目をこすりながらも何かしら重要な記事で新聞が埋まっているような気持ちだけはした。そのタブロイド判の新聞を見ると「新型特殊爆弾、わが方損害甚大」という大きな見出しが目に入った。広島に原爆が投下された翌々日のことである。

事態の深刻さが読み取れた。出発するその日に見た新聞が、韓が初めて見た原爆報道だった。八月七日の午後三時三〇分、大本営は次のように発表したのだ。

一、昨八月六日廣島市は敵B 29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり。二、敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり。

『朝日新聞』（東京版）の八月八日付けの見出しは「廣島へ敵新型爆弾 B 29少数機で来襲攻撃」となっている。

一抹の不安を抱えながらも八日の午後三時頃、韓を乗せた船は新潟港を出港した。およそ二四時間後の翌九日の午後には目的地の羅津ラジン（現在、北朝鮮の港町である）に着く予定だった。しかし、どうも様子がおかしい。しばらくして韓は、船に軍の一小隊がいるのに気付いた。小隊は（アメリカ軍の機雷や出撃に備え、船を守る）という。兵隊たちは高射砲を操縦して「目標！」と掛け声をかけて演習しているのだ。

そして九日の午後になった。船上のマイクから、「ソ連の参戦があったので、この船は元山ウソサン（北朝鮮の港湾都市）に向かう」という放送があった。

ソ連はいずれ参戦するだろう。韓はなんとなく、そういうふうには事態を見ていた。ソ連と国境を接する中国の東北で育った韓には、ソ連は（怖い国）だというイメージが刷り込まれていた。ソ

連の参戦は、韓の頭にはスケジュールとして入っていた。どうして日本政府は甘い観測をしていたのかという思いがあった。現実には、日本は部隊を南方戦線に移動していた。ソ連は虎視眈々と日本参戦への時期を狙っていたのだ。

元山に向かっているはずの船はしかし、なかなか目的地に着かない。普通なら二〇時間ほど着くはずである。徐々に「ソ連の制空権に入っていくので、船はもつと南に向かう」という。船上の人々の動きを見ていると、少しずつわかってきた。船には満鉄（南満洲鉄道株式会社）の社員とその家族が大勢乗っているのだ。船は暁部隊の輸送船団だった。陸軍船舶部隊、通称「暁部隊」とは陸軍の海上輸送船団である。

一〇隻ほどの船団のうち、九隻の船に積まれていたのは日本の機械類だった。満洲へ疎開するのだ。本土決戦になったら、抗戦の基地を満洲にもっていく作戦だと韓は聞かされ、満洲でアメリカを迎え撃つのだろうと推測した。

韓が乗った一隻の船には、およそ一二〇〇名が乗船していた。徐々に食糧や水が無くなってきた。一晩で朝鮮の羅津に到着すると思っていたから、それだけの食料と水しか積んでいない。船上のマイクからはそんな情報が流れてくる。続いて、「元山に向かうことも難しいので、皆さんを釜山プサンへ連れて行く」という放送が流れ、食糧を確保するためにこれから島根県の隠岐に行くという。しかし、隠岐からも補給を断られた。どこへ行っても食糧難である。

救命胴衣である竹筒を体の前と後ろにいつぱいつけた韓は、不安と好奇心を伴いながらデッキか

ら様子を見ていた。そうしてやっと八月一四日の夕方、鳥取の境港に着いた。そこで水と食糧を積んだ。

翌八月一五日期六時、釜山に向けて出発した。船は順調に進んだ。しかし、一二時頃になったが、どうも様子がおかしい。なんだかわからないが韓には、後戻りしているような感じに見えてきた。みんなが口々に、「なんだ、なんだ！」と騒ぎ出した。そうこうするうち、船はＵターンし、その夜の六時、再び境港に戻ってきたのである。

日本の敗戦を船上で聞く

いろいろな噂が飛び交った。日本人の中には、乗船者の中にスパイがいたのが発見され、本土に送還するらしいと言う者もいた。

この間、船上で軍人たちの演習はあったが、機関砲などを撃つことはなかった。ところが、一五日の午後になって機関砲を撃ちだしたのだ。韓たちはデッキにいる。それなのに、高射砲を横にして撃つ。横に撃つから砲弾は、跳ねるように軌跡を残す。兵士の中には、銃器や弾丸を海に落とす者もいる。ひよつとしたら〈反乱〉が起こっているのかもしれない、と韓たちは思った。

その夜は、境港の船上で泊まった。そして翌一六日の朝、みんなを乗せた船は出港した。韓は今度こそ釜山に行くのだと思った。ところが、またまた方向が違う。今度は北に向って走っているのだ。しばらく航行すると、陸軍中尉が重要発表を行うという。マイクから聞こえる声に耳を傾けた。